

第百回記念大会を終えて 「コロナ禍の大会開催のキセキ」

企画運営委員長 毛内 嘉威



企画運営委員会の役目は、「学会の春季・秋季大会の企画・運営」です。

育学会は、昭和三十三年一月の第一回大会から始まり（昭和四八年まで年一回の開催）、昨年度、第百回という節目を迎えることができました。これは、道德教育に関する研究及びその普及を図り、日本を発展させようとする先人の願い、先輩方、そして会員の皆様のご努力の賜物です。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって、大会の継続が難しくなったときも、各大会運営委員長のご尽力により乗り切ってきました。令和二年度春季大会（第九五回大会）は紙上開催という手段で乗り切りました。令和二年度秋季大会（第九六回大会）から令和四年度春季大会（第九九回大会）迄は、オンライン開催で実施し、多くの参加者が集いました。

このようなコロナ禍の中、記念すべき第百回記念（令和四年度秋季）大会をどのようにして開催す

るか、答えが出ない中、決断の根拠は、道德教育の発展に寄与し、学会員の更なる研究を促進できるかどうかでした。最終的には、貝塚大会運営委員長及び関係者の英断により、対面を中心に一部オンライン参加も取り入れたハイブリッド形式での開催となりました。令和四年十一月一九日・二十日の二日間にわたり、武蔵野大学の武蔵野キャンパスにおいて、テーマ「持続可能な社会を実現するために道德教育に何ができるか」日本道德教育学会が果たすべき未来への使命と役割」として、第百回記念大会が開催されました。

本学会初の試みであるラウンドテーブルも、対面開催が実現したおかげで、九の部会で四十名以上の会員が企画者や報告者、指定討論者として発表等を行い、活発な議論が展開されました。特別講演では、日本哲学学会会長の一ノ瀬正樹先生に「哲学倫理学と道德教育のはざま」という演題で提案があり、新たな視点から議論がなされた意義深い講演でした。その後の第百回記念大会祝賀会では、マスクを付けて道德談義に花を咲かせ、

対面での再会を懐かしみました。道德を語る仲間の存在、共に語り合い、高め合うことの大切さを実感しました。

●コロナ禍の大会開催の軌跡（奇跡）

【令和二年度】

第九五回大会（春季）紙上開催

東京家政大学（走井洋一運営委員長）

第九六回大会（秋季）オンライン開催

畿央大学（島恒生運営委員長）

【令和三年度】

第九七回大会（春季）オンライン開催

宇都宮大学（和井内良樹運営委員長）

第九八回大会（秋季）オンライン開催

札幌国際大学（平野良明運営委員長）

【令和四年度】

第九九回大会（春季）オンライン開催

東京家政大学（走井洋一運営委員長）

第百回記念大会（秋季）対面・オンラインのハイブリッド開催

武蔵野大学（貝塚茂樹運営委員長）

大会開催にご尽力頂いた各大会運営委員長には、感謝の念しかありません。走井先生には、紙上開催・オンライン開催と二回も開催して頂き感謝です。

（秋田公立美術大学）



学会ノート

教育界において、ウエルビーイングの実現が標榜されるようになり、その実現に向けた議論も活発になりつつあります。ウエルビーイングの実現に向けては、エージェンシーや多様性・包摂性といった概念の検討が必要と思われますが、それらに加えてウエルビーイングの原義である「幸福」そのものの検討も求められると考えます。

ケアリングで有名なネル・ノディングズは、「そもそも、（子供が）さまざまな幸福観を整理して自分自身の見解を打ち立てたり、自分自身の見解を修正したりすることよりも大事なことがあるのでしょうか。」と述べています（『幸せのための教育』）。

幸福には、医学的・快楽的・エウダイモニア的なアプローチ、主観説・客観説など、様々な捉え方がありますが、ノディングズが言うとおり、子供が幸福観を更新していくことが、今後、より重要になるのではないのでしょうか。

この考え方は、「よりよく生きる」ことを理念とする、日本の道德教育と重なる部分が大いにあると思います。道德教育において、子供が真正面から幸福観について考えることについて、学会員の皆様と議論する機会が得られたらと思います。

（浅部 航太）

文部科学省における道德教育の新しい動き

今号では、令和5年度文部科学省予算における道德教育関係予算についてお知らせします。

1 道德教育の抜本的改善・充実に係る支援

① 道德教育アーカイブの充実

道德の「特別の教科」化の趣旨を踏まえ、「考え、議論する道德」の授業づくりの参考となる授業動画については、この2年間新型コロナウイルス感染症の感染拡大もあり、新規の授業映像の配信が思うようにできませんでした。しかし、令和5年度については、授業映像の配信を加速させていく予定です。そのための方策の一つとして、全国小学校道德教育研究会、全日本中学校道德教育の両団体に協力いただくことになっています。

また、配信した授業映像を活用していただくための方策として、独立行政法人教職員支援機構や各教育委員会等との相互の連携により活用促進、認知向上を図っていきたいと考えています。

② 学校や地域等が抱える課題に応じた取組の支援

「特別の教科」化以降の各地域で様々な取組が進められてきました。それらの実践的知見の見える化・共有化を図るため文部科学省の「道德教育アーカイブ」の地域版ともいえるべき「地域アーカイブセンター」を設置する取組を新たに始めたいと考えています。

その他の取組として、以下のような

ことを計画しています。

- ・道德科の授業改善に向けた指導や評価方法の研究・成果普及
- ・道德教育推進教師を中心とした実働する機能的な指導体制構築に向けた取り組み
- ・家庭や地域社会との連携を図った道德教育の実践・成果普及
- ・地域教材の活用等を通じた地域の特色を生かした道德教育の実践・成果普及

2 道德科の教科書の無償給与

小学校及び中学校の道德科の教科書の無償給与を実施するための予算として39億円を計上しています。

今後、各自治体や学校設置者等において、これら道德教育の充実のための予算を活用した事業が展開されると思いますが、会員のみなさまにおかれましては、様々な立場でこれらの事業に関わっていただき、道德教育の充実、更なる推進にお力添えをいただきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(飯塚 秀彦)

道德教育アーカイブ



委員会からのお知らせ

編集委員会

学会誌『道德と教育』第343号(令和6年3月刊行)に関するお知らせは、次の通りです。

- 1 『道德と教育』第343号(令和6年3月刊行)の原稿締切日は、令和5年9月30日(必着)とする。投稿資格は、日本道德教育学会会員であり、令和5年9月30日までに当該年度の会費を納入している者とする(単著、共著にかかわらず著者は本学会の会員でなければならない)。
- 2 投稿は学会ホームページ掲載の「学会誌執筆要領・投稿規定」に基づいて行うこととする。(※令和4年4月改正。引用・参考文献の表記法を変更しているため、論文執筆時に必ず確認すること)。
- 3 投稿論文は「研究論文」「実践研究論文」「研究ノート」の3種類とする。
- 4 投稿論文原稿の字数は、本文、図表、註、引用文献を含めて、A4版横書き10ページ以内(全ページを、1ページ40字×40行以内で作成すること)とする。
- 5 投稿論文には、以下の別紙を作成して必要事項を記載し、添付することとする。
別紙1: 論文の種類・氏名・題目・所属・連絡先(住所、電話番号、メールアドレス)
- 6 本文の註記は、『道德と教育』執筆要領・投稿規定の例を参考とするものとする。
- 7 投稿の際には、論文原稿(4部: 正本1部、コピー3部)、別紙1(1部)、別紙2(4部)、該当者は別紙3(4部)を作成し、「投稿論文チェックシート」と共に提出するものとする。
- 8 審査の公平を期するため、論文原稿・別紙2及び3には氏名・所属等を記入しない。最終原稿提出の際には、電子媒体(CDないしDVD)も併せて提出することとする。ただし、投稿の際(9月30日締切)には電子媒体の提出は必要としない。

別紙2: 論文の種類・題目・キーワード(3~5個程度)・和文要旨(400字以内)・英文題目・英文要旨・英文キーワード(ただし、英文は、編集委員会に依頼することができる)。
別紙3(該当者のみ): 投稿論文に関連する業績の報告

この論文に関連する内容の論文等(口頭発表を除く)を公表した実績がある場合、「該当の論文等の題名、掲載誌、掲載年、本論文との相違点」を報告することとする。

なお、「関連する内容」とは、主題の類似する研究、同一の実践事例(授業・研修等)や調査データ・資料を用いた分析等を指す。

投稿規定に沿わないと編集委員会が判断した投稿論文原稿は受理しない。

8 投稿論文原稿の提出先及びお問い合わせ先

〒195-8550

東京都町田市広袴1-1-1

国士舘大学体育学部 こどもスポーツ教育学科 関根明伸研究室

日本道德教育学会学会誌編集委員会

TEL/FAX: 042-736-2308

E-mail: sekine@kokushikan.ac.jp

※提出は郵送でお願いします。問い合わせはなるべくメールでお願いします。

(関根明伸)

企画運営委員会

1 はじめに

企画運営委員会は、道德教育の発展と学会のすそ野を広げるべく、春季・秋季大会の開催地を検討し、理事会の議を経て、総会にて決定しています。

各大会の運営委員長は、道德教育を発展させるべく大会テーマを決定し、基調講演や大会テーマに結びつくシンポジウム等を企画していきます。

第101回大会では、小・中学校における公開授業やラウンドテーブル等を設定し、道德教育の様々な課題に取り組みます。また、企画運営委員会では、対面とオンラインによるハイブリッド化等も推進し、子育てや介護などにあたる会員の参加機会の拡充等、参加しやすい環境にも努め、優しい学会となるように、会員の皆様と考えていきます。

2 大会計画について

【令和5年度大会計画】

○第101回大会 (令和5年度春季)

令和5年7月1日～2日

新潟青陵大学 (中野啓明運営委員長)

○第102回大会 (令和5年度秋季)

令和5年11月11日～12日

宮崎大学 (椋木香子運営委員長)

【令和6年度大会計画】

○第103回大会 (令和6年度春季)

横浜商科大学 (東風安生運営委員長)

○第104回大会 (令和6年度秋季)

静岡大学 (藤井基貴運営委員長)

【令和7年度大会計画】

○第105回大会 (令和7年度春季)

国士舘大学 (関根明伸運営委員長)

○第106回大会 (令和7年度秋季)

岐阜大学 (柳沼良太運営委員長)

なお、令和8年度以降の春季大会、秋季大会の会場等は決まり次第お伝えします。

(浅見哲也、毛内嘉威)

研究委員会

学会員の探求心に火を点ける

研究委員会のポリシーは、「学会員の探求心に火を点ける」です。千名余に及ぶ会員の研究ニーズは、それぞれ多岐にわたります。そんな会員の多様な研究ニーズに応えるべく、学会大会とは別に会員が通年的に自己研鑽する機会とできるよう令和3年度よりオンラインによるセミナーを継続開催しています。また、諸事情で当日の参加が叶

わない会員のためにYouTubeでのオンデマンド配信も期間限定で行っています。

もちろん、令和5年度のオンラインセミナーも5回開催予定で、既に日程や内容等も確定しつつあります。以下にご案内申し上げますので、会員各位のニーズに沿ってスケジュールを今から空けて頂きますと幸いです。

《令和5年度オンラインセミナー計画》

① 8月6日 (日) 15時～17時

「論文執筆セミナー」

テーマ「研究論文および実践研究論文執筆構想とその取りまとめ方」

※編集委員会と連携開催。

講義Ⅰ「教育現場の実践者から実践研究論文執筆へのアプローチ」

中野真悟先生 (刈谷市立朝日小学校)

講義Ⅱ「研究論文の執筆・投稿時のポイントと査読コメントの読み方」

吉田誠先生 (山形大学学術研究院)

② 9月10日 (日) 15時～17時

「道德教育研究セミナー」

テーマ「道德科教育 (学) をどう研究するか」

発題者Ⅰ…浅部航太先生 (東京学芸大学教職大学院)

発題者Ⅱ…柳沼良太先生 (岐阜大学大学院)

③ 10月8日 (日) 15時～17時

「道德教育実践事例研究発表会」

発題者…遠藤信幸会員 (令和4年度実践研究事例採用者)

※これまでの事例研究採用者 (令和2、3年度採用者) を交えて座談会も予定。

④ 11月25日 (土) 15時～17時

「道德科『授業づくり』セミナー」

テーマ「道德科における個別最適な学びと協働的な学びの実現」

※神奈川支部との共同開催。

⑤ 3月10日 (日) 15時～17時

「道德教育研究セミナーⅡ」

※「教科教育学コンソーシアム事業」との共同開催。

☆各セミナーの詳細な内容はその都度、学会HPをご参照ください。

《実践事例研究原稿公募について》

毎年恒例事業となっている「道德教育実践事例研究原稿」の公募を、今年度も実施します。具体的な公募要項や応募原稿の採用手続きに関する内規等の詳細は学会HPをご参照ください。

今年度も多くの方々に応募頂きたいと考え、内規を見直しました。その関係で、応募締め切りを例年より1か月遅らせ、12月末日としました。また、実践事例内容も考慮し、応募原稿枚数を最小6頁～最大10頁と改めました。

どうぞ、一人でも多くの皆様からのご投稿をお待ちしています。

(田沼茂紀)

広報委員会

広報委員会は、第76号～第79号を発行します。新たに、「道德教育を支えてきた名著」シリーズと研究委員会とコラボした「論文執筆のための講座」4回シリーズの連載を始めます。

(島恒生)

シリーズ日本の道德教育への提言 「質的転換」を定着させるには

堺 正之

今年度、中学校の道德科は五年目を迎えています。この春に大学に入学した学生の多くは、中学校三年生のときに道德科への変更を経験しています。道德科の授業を受けた学生たちが、いよいよ大学で教職課程を履修する時代になりました。

目の前の学生が当時の変化をどのように受け止めていたのか関心があり、今年度から所属校で担当している一年次科目「教職概論」の授業で話題にしてみました。多かったのは、それ以前も道德の授業は行われており「特に変化はなかった」という反応です。その上で、「教科書は使用されなかった」「一年生のときから教科書は使っていた」「『私たちの道德』が教科書だった」「ラジオ番組を聴き感想を述べ合った」「いじめと人権がテーマだった」という感想も聞きました。本人の知識不足、記憶違いや誤解に基づく言い回しもあるでしょう。そもそも、この年に制度上の変更があったことを知らないという学生も多かったのです。

一方、多数ではありませんが、明確な変化を感じていた学生もいます。「毎週、授業が行われるようになった」「グループで話し合ったり演じたりする機会が増えた」「以前は授業当日に教材プリントが配布されていたが教科書を（ノートも）自分で持つようになった」「正解のない問題についてみんなで考

え話し合えるのが好きだった」「学級担任以外の先生の授業も楽しみだった」などです。

考えてみれば、道德の教科化に際して叫ばれた「質的転換」は、生徒に対してわざわざ宣言して取り組まれたものではありません。下手をすれば学習に「ギャップ」を生じ、障害とさえなりうるからです。「変化はなかった」ことを好意的に解釈すれば、どんな生徒に対しても「分かりやすく」を心がけ、これを体感としてもっておられる先生方は、円滑な移行に配慮されたのかも知れません。何らかのインパクトを契機として新たな教育内容や方法の導入が図られた過去の例でも、普及した背景には変化と整合する理論・実践の素地がすでにあつてそれが再評価されたとも言えるのです。

このたびの制度上の変更に「質的転換」が伴い、よい循環として定着するには、世代単位の時間を要するかも知れません。大げさな表現ではありません。小学校一年生のときから道德科の授業に親しんだ世代が教師として教壇に立つのは、あと十年ほど先のことです。自身が受けた授業を参考としながらも、これを批判的に乗り越える力を身に付けてほしいものです。それまでこのサイクルにはちゃんと機能してもらわなくてはなりません。そのためには、道德科の授業や教材に対して社会が関心を持ち続けること、道德教育の関係者がこれに応え続けることが欠かせないと思います。

(九州女子大学)

道德教育研究・実践の探訪 研究室編

道德科と公民科倫理を繋げる

國學院大學 澤田浩一



私の勤務する
渋谷キャンパス
には、文学部・
法学部・経済学
部・神道文化学
部の四学部が置
かれており、公民科教育法、社会科学教育法、道德教育の理論と方法、教育と社会を担当しております。茨城県立の高等学校教諭から、文部科学省国立教育政策研究所の調査官の職を得て、九

年間、中学校道德科の創設に関わるお仕事させていただきました。その後、高等学校の道德教育の中核的な指導場面である公民科の新必修科目「公共」と新たに選択科目となった「倫理」の改訂も担当しました。道德教育の研究ではありません。中学校道德の授業の実践者でもありません。中学校「道德科」と高等学校公民科「倫理」を繋げることで、倫理学等の研究と道德教育の仲介者として実践的理論の構築、理論に裏打ちされた実践のためのお手伝いのできたらと考えております。

九鬼周造先生は、「哲学私見」の中で、「道德とは、存在の建設である」としました。自分の行為によって自分の存在を作っていく。社会の規範である「あるべき在り方」(たてまえ)と「現にある在り方」(ほんね)の間で悩み考えた末に選択するものこそ生き方に違

いありません。メアリー・ウォーノック氏は「考えるあなたのための倫理入門」の中で、「倫理とは複雑なものである」とし、「その主要な部分は判断と決断、思考と情緒、しかるべき時にしかるべき感じ方をするのであり、しかも様相が毎回異なる」としています。伊藤亜紗氏は『手の倫理』において、「さわる」と「ふれる」ことの違いから、道德と倫理の違いを説明しています。伊藤氏によれば、道德とは「一般的に正しさ、善」を意味し、一方的に伝達され、安心にとどまるのに対して、倫理とは、「個別のすべきこと、生き方」を意味しており、相互的に生成され、信頼が形成されるとしています。伊藤氏は、さらに古田徹也氏が「それは私がしたことなのか」のエピソードの中で示されている「道德と倫理の区別」を紹介し引用します。「道德」は画一的な「正しさ」「善」を指向する。万人に対する義務や社会全体の幸福が問題となる。「倫理」は、「すべきこと」や「生き方」全般を問題にする。「自分がすべきこと」や「自分の生き方」という問題も含まれる。古田氏はさらに解説しています。「道德」は非難と結びつく。「すべき」が「できる」を含意する。「倫理」は非難とは必ずしも結びつかない。「すべき」が必ずしも「できる」を含意しない。古田氏に

即して考えると、中学校の道德科は、「倫理」なのではないかと思えます。「倫理」では、答えが定まっていらない。現在進行形の重要な問題に対する検討も含まれ、価値を生きるだけでなく、価値について考え抜くことも含まれるとしているからです。

理論と実践を繋ぐためには、内容項目とその解説の改善が課題です。A1の項目を例にします。今回の改訂において、視点による整理の問題性が指摘されています。大島康正先生の時代には、社会的自由と実存主義による個体的自由が対比的に論じられていました。鷺田清一氏は、「へひとの現象学」の「6(個) 自由の隘路」の中で、「他である自由」を論じています。他者たちとの相互依存のなかの自由。「自己の自由の擁護」へと閉じるのではなく、「他者の自由の擁護」へと開かれることを説かれています。自由をAの視点だけで理解してはいないでしょうか。Dの視点からも考えてみましょう。竹村牧男氏は『鈴木大拙 願行に生きる』の中で大拙の自由とはそのものがそのものとしてあることが根本であり、それは自性からではなく妙用として発揮され、おのずから他者への慈悲行三昧となつて展開すると解説します。大拙先生は『禅のつれづれ』の中で、「自由」は絶対の自がそれ自らのほたらきで作用すること、積極的に、独自の立場で、本奥の創造性を、そのままに、任運自在に、遊戯三昧することとしています。他の視点も考慮した道德的諸価値の理解が必要であると考えています。

道德教育研究・実践の探訪

教育センター編

兵庫県立教育研修所 萩野 奈幹

兵庫県立教育研修所(以下、「研修所」)は、「研修」「研究」「情報発信・支援」の3事業を通して、「兵庫が育む ころ豊かで自立した人づくり」の実現に向け、教職員の資質向上への支援に努めています。今回は、令和4年度に取り組んだ道德科の研修プログラムの開発に関わる研究について紹介します。

○子どもの学びの姿に照らして考える道德科研修プログラムの開発

本研究は、教員の道德科の授業に対する課題意識を踏まえ、教員が研修に求める内容を明らかにした上で、校内・校外を問わず活用できる「子どもの学びの姿に照らして考える道德科研修プログラム」(以下、「プログラム」)を開発し、その効果と課題について考察しました。

「令和3年度 道德教育実施状況調査 報告書」によれば、学校では一定程度、道德科の指導と評価に関する研修が行われていたものの「道德教育推進教師が中心となつて道德教育に関する研修の充実を図った」学校は3割程度でした。また、道德教育推進教師を中心とした研修の実施を支えるような研修プログラムが必要ではないかと考えました。

そこで、初任者及び中堅教員を対象に道德科授業に対する意識や課題につ

いて調査を実施しました。いずれも、どのように授業づくりを考えればよいのか、どうすれば深まりのある授業ができるのかという実践上の悩みや難しさがあります。その背景には、道德性の育成が求められ、授業に対する苦手の意識等から、授業に手応えを感じられない現状も窺えます。指導に関しては「発問の吟味」「教材分析」は実践されていますが「子どもの反応や発言の想定」は、あまり意識されていないことが明らかになりました。そのため、子どもの学びや発達の段階を考慮した指導や、指導と連動させた評価に課題があるといえます。

3部構成の本プログラムは「どれも・どこからでも」学校の課題や目的に合わせて柔軟に活用することができま。なお、本研究での「子どもの学びの姿」とは、学習過程において「どのような発言やつぶやきが子ども達から表れるだろうか」というように、ねらいに照らして子どもの学びの姿を具体的に考えることと捉えています。各プログラムの概要は次の通りです。

●理論編「授業づくりの基本」

理論編では、道德科の特質を生かした授業づくりの基本的な内容を学びます。教員の課題意識や悩みに寄り添いながら、何のために道德教育や道德科の授業を行うのかを考えます。道德科

の目標、内容、教科等との違い等を確認し、授業づくりについて理解できる内容です。

●実践編「対話で深める指導」

実践編では、授業プランシートを活用し、子どもたちの学びや新たな気づきとして、どのような発言や反応が表れるかを具体的にイメージし、そこから遡る形で中心発問やねらいに向かう発問を吟味します。さらに、子どもの学びの姿と問い返し等を往還しながら、ミニ模擬授業を生かして、対話で深める授業の在り方について、実践的に学ぶことができる内容です。

●評価編「認め、励ます個人内評価」

評価編では、評価に関する正しい理解や、教科と道德科の評価の違い、評価に向けて重視する視点、学習状況の把握やそれに基づく記述による個人内評価の在り方について演習を通して学びます。道德科の評価の意味について、理解を深めることができる内容です。

教員が実践的、協働的に学ぶことができ、なおかつ道德教育推進教師等が中心となり、実施可能な研修プログラムを開発することは、校内研修の充実や、教員の指導力向上に向けた有効な手立てになると考えます。左の2次元コードを読み取り、スライド資料、研修の進め方等の資料をダウンロードするポイントや研修を行う上でのヒントを多く掲載しています。



▲研修プログラム
2次元コード

会員の声 (私と学会)

多層的・重層的な学びの場と
としての学会の可能性と展望

瀬戸山 千穂

昨年十一月、三年ぶりに対面にて開催された第百回記念大会は、決して忘れられない、節目の大会となりました。コロナ禍前に産育休に入ったわたしは、今までのように学び続ける機会の確保に難しさを感じていたものの、学びを深める場を求め続けていました。子どもがかわいそう、小さい子がいるのに自分の学びの時間なんてとんでもないと、苦言をいいただいたこともあります。

そのような状況の中、家族の協力のもと、参加させていただいた記念大会。五年振りの対面での大会はまさに圧巻でした。自分はこのような学びの場をずっと求め続けていたのだと確信しました。次世代を担う研究者・実践者からの提言では、諸先生方の一言一句が心の芯まで響き、救われる思いで拝聴しました。ここにいてもいい、学び続けていいと力強く背中を押していただいた思いで会場を後にしました。さらに、様々な環境、過酷ともいえる状況の中で、日本の道德教育をもっとよくしたい、子どもたちの可能性をより大きく拓きたいと願う多くの諸先生方と同じ空間・時間を共有できたことも、大きな財産となりました。

ニュースでも話題に上がった、日本の将来推計人口における十四歳までの

年少人口は、二〇二〇年の一五〇三万人から、五〇年後には約半分の七九七万人に減り、総人口に占める子どもの割合は九%にまで落ち込む見通しだそうです。当然、労働人口も減少していきます。学校現場では既に、一人か二人欠員がいることが当たり前になりつつあります。このような状況の中で、

本学会で一定の会員数と質を保持しながらも、諸先輩方が築き上げてきた偉大な研究をさらに深めていくためには、会員一人ひとりのニーズを捉え、個別の状況に合わせた学びの機会や方法の提供、すなわち多層的・重層的な学びの場が、今後ますます重要になると思います。そしてこれは、今まさに現場で求められている「令和の日本型学校教育」そのものの姿であるといえます。

弓削・新井(二〇一二)は、学級集団づくりにおける教師の指導性として、「養う」機能と「ひきあげる」機能を挙げています。わたしは、これは学級集団に限ったことではないと考えています。成長し続ける集団は、この両機能がバランスよくはたらいっていると考えるのです。切磋琢磨する中でも、相手を尊重し耳を傾け、受け容れる風土。様々な状況を鑑みた上で、相手の成長を願い、その人に届く言葉で真意を伝えようとする努力。これらは自分の在り方に対する自戒も込めて記しました。そのような学びの場をつくる主体者としての自覚をもち、諸先輩方から学ばせていただきながら、今後も活動を続けていきます。

(前橋市立大胡中学校)

『德育如何』 福沢諭吉

『德育如何』は、明治10年代の德育論争にて、道德教育のあり方や方針を根本的に問い直すことを迫った著作です。

一 書誌的事項と背景

本書のもとになったのは、1882(明治15)年10月21日から25日まで4回にわたって「学校教育」というタイトルで『時事新報』に掲載された社説です。表紙には「福澤諭吉立案 中上川彦次郎筆記」とあるものの、全文が福沢による執筆と推定されています。

本書は、明治10年代におけるいわゆる儒教主義の復活や德育論争といった思想的な背景の中で出されたものであるため、その文脈で読み解く必要があります。「教学聖旨」以降、明治政府や文部省の教育政策は、学校教育を儒教に基づく德育を中心に行う方針が強まり、実際に改正教育令(明治13年)では修身科が筆頭科目となり、文部省編集局が出版した『小学修身訓』(同年)には忠孝道德が盛り込まれていました。

二 德育と「公議輿論」

『德育如何』は、こうした德育をめぐる動向を正面から批判する内容です。福沢はまず初めに自らの教育観を「人心は草木の如く、教育は肥料の如し」という比喻を用いて表現しています。つまり、教育の効果には長い時間がかかり、また草木の成長には、肥料よりも空気や

道德教育を支えてきた名著 2

日光、土壌が不可欠であると述べています。そして人の智徳とは、教育によって大きく発達するが、その発達を助けるのみであり、智徳の根本は「祖先遺伝の能力」「生育の家風」「社会の公議輿論」によって発達するということです。このうち「公議輿論」は、人生の智徳を発達・退歩・変化させ、その影響力は学校教育に勝ると断じます。

そして昨今の教育家の人心の荒廃を憂うる考えには同意するものの、旧来の儒教によって德育を強化するという方法は、肥料のみで草木が育つと考えているに等しいと厳しく批判します。若者の不道德の原因は、学校教育や教師、教科書などの不完全から生じているのではなく、開国と維新という歴史的転換、つまり「輿論」の様子が変化したことが主な原因であるとしています。

福沢は、社会を「智徳の大教場」と捉え、教えずして知る智があり、学ばずして得る徳がある場所であるととし、その一部でしかない学校という教場よりも智徳の発達に大きな影響を及ぼすと考えています。それゆえ現在の「公議輿論」である「自主独立」に従った徳教に変えていくことで、自ずと学校の教育も変わっていくと論じているのです。こうした福沢の立論は、德育論争にあって、その内容や方法を趣旨とする論者が多く中で、德育や学校教育のあり方そのものを本質的に問うた、独特の位置にあるものだったといえます。

三 令和の德育論争

このように『德育如何』において福沢は、世の不徳を正すには、学校の德育を改めるといふ局所的な対処ではなく、社会の気風に適する全体的な対応こそが必要と指摘します。また道德や德育が不変である硬直的なものではなく、時代や状況によって異なる可変的なものとして、その時の世の「公議輿論」に適用ものでなければならぬとも言います。

さて、令和の「公議輿論」とは何でしょうか。福沢に言わせれば、その「公議輿論」を見極め、それに基づいた社会構築と教育改革への志向が最上の德育に繋がるということになります。『德育如何』は、社会の一部を担う学校とそこでの德育の真に妥当な方向性とはどこなのかをあらためて考えるきっかけを今日に与えてくれます。その意味では、明治のそれを踏まえた、令和の德育論争が社会全体で起こることが待ち望まれます。

なお、『德育如何』の続編ともいえるべき論稿が、『德育余論』（明治15年）です。ここで福沢は、地方の小中学校は智育のみを教えるところと割り切つて、全国一般の德育は宗教、すなわちこれまでわが国の道德意識を養ってきた仏教に任せるべきであると論じています。こちらと併せて『德育如何』を読むと福沢の道德教育論がさらに理解できるでしょう。

※『德育如何』はデジタル資料としてウェブ上で閲覧することが可能です。

（麗澤大学 江島 顕一）

私の実践 道徳科における個別最適な学び

札幌国際大学 安井 政樹

「令和の日本型学校教育」の構築を目指して、全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現（「答申」）（文部科学省2021）では、目指すべき新しい時代の学校教育の姿として「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」が提言されました。この答申の教育課程に関する事項について、より詳しい内容を取りまとめられた教育課程部会における審議のまとめでは、学習指導要領において示された資質・能力の育成を着実に進めることが重要であり、そのためには新たに学校における基盤的なツールとなるICTも最大限活用しながら、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と、子供たちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実が図られることが求められるとされています。「個別最適な学び」については、「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理され、児童生徒が自己調整しながら学習を進められるような指導の重要性が指摘されています。

GIGAスクール環境を生かした取り組みが全国でも広がり、ICTを活用して、一人一人の意見を共有することと議論の入口として協働的な学びを生み出す実践などが多く報告されています。これは、デジタルがもつ即時集

計や即時共有を生かした実践です。一方で、「個別最適な学び」についてはまだまだ実践が進んでいない印象があります。

そこで、今回は「個別最適な学び」を生み出す実践をご紹介します。

多様なニーズにこたえるために、思考や表現を促進する端末活用も可能です。音声入力やフリック入力、キーボード入力など思いを表現するという点とも、その方法の一つです。また、板書を書き写すことで学びを整理できる子もいれば、撮影してその板書の写真に印や書き込みをする方が自分の学びを整理できる子もいます。板書をノートに写すのではなく、板書の写真を蓄積することもできるのです。これらは「指導の個別化」の一例です。このような多様な学びの機会を生むには、教師が一律に学び方を決めず、活用の機会を奪わないことが重要です。紙のノートに書いた場合には、写真として保存し、e-ポートフォリオとして、年度を超えて学びの蓄積を生かせるようにするような端末活用も始めていた方がいいところです。

「学習の個性化」については、そもそも道徳科は、自分の生き方とつなげて考えるという点でとても相性がよいと言えます。内容項目を端的に示した「19の心」を基にして実践を行いました。子供たちは、教師の範読後に「11番の

心がたりないと思います。」「9番も足りないよ。」「最後は4番があったね。」「自分なりの教材の見方を語ります。内容項目間のつながりを見つかけながら、教材から学べることを話し合いました。



道徳 すてきに生きるために
大事な 19 の心 (低学年用)

授業の終末には、フォームを用いて「今日の学習を通して、大切にしたい心」を選択し、その理由を端末に記録しました。自分の日々の経験と本時の学びを結びつけながら自己の生き方を考えます。一人一人が大事にしたい心を見つめ、個別最適に自己の生き方を考えることができ、経験を含め「知のネットワーク」を構築する深い学びを生むことにつながると考えます。本時にどのような学びをしたかを端末で蓄積し、年度を超えて子供自身も教師も生かせるようなデータ活用が、さらなる個別最適な学びにつながっていくのではないのでしょうか。

論文執筆のための講座(第2回)

「研究論文、実践論文執筆入門」

荒木 寿友

論文執筆…どこに気をつけるのか?

日本道德教育学会の学会誌『道德と教育』には、投稿原稿査読の内規が存在することをご存知でしょうか。そこでは査読についての留意点が、以下のよう示されています。まずはこれらについて簡単に確認していきましょう。

- ① 独創性(Originality)・斬新性(Novelty・Innovation) など学会論文としての基本的資格要件を充足していること。
- ② 有用性(教育の改善や発展に役立つ、資料的価値が高い)に富んでいること。
- ③ 信頼性(データの取得・収集やその処理における正確さ)、理論構成や論理展開が妥当性を確保していること。

- ④ 先行研究を踏まえており、表現が的確・適切であり、わかりやすいこと。
- ⑤ 特に「実践研究論文」においては、実践内容の特徴がよくわかるように記述されていること。

①の「独創性」や「斬新さ」とは何を表しているのでしょうか。これは何も道德教育学会だから必要とされる事柄ではなく、あらゆる研究に対する基本的な資格要件といえます。研究と言えるかどうか、この独創性と斬新さに現れると言っているのでしょうか。独創性、オリジナリティとは、簡単に言えばこれまで誰も明らかにしていないという事です。こんな面白いことを思いついた、これまでの先行研究や実践

を調べてみたけれども、誰も明らかにしていない、そこに独創性や斬新さが表れてきます。つまり、研究における問いそのものが新しいかどうかということの意味しており、その斬新さを判断するためには、④の先行研究を踏まえているということが重要になってきます。あるいは、問いそのものは新しくはないかもしれないけど、先行研究とは切り口が異なっていて、そこに独創性が見出されるということもあります。いずれにしても、独創性や斬新さというのは、先行研究を踏まえないとわからないということになります。

②の「有用性」とはどういうことでしょうか。すでに示してあるように、その研究が教育の改善や発展に役立つこと、あるいは資料的価値が高いということを意味しています。特に教育の研究は独善的であることを目指すのではなく、研究結果が教育の世界の問題解決に結びついている必要があります。つまり①と④で考えた独創的な問いや切り口によって解決された問題が、②子どもや教員などの役に立つ、助けになるということと結びついているということです。

このように有用性を元に問いと問題解決が結びついていくわけですが、その論証過程において虚偽があつてはなりません。嘘のデータや論理展開に無理があるものは研究とは認められませんが、それについて示してあるのが③の信頼性と妥当性なのです。文献研究において、筆者が主張していることを読

み違えて引用することも、「嘘のデータを用いる」ということに該当します。⑤の実践論文においては、どんな実践を試みたのか読者にわかるように書くということも大事なポイントです。

論文とは何か?

以上、査読のポイントを見てきましたが、結局のところ「論文を書く」ということはどういうことなのでしょう。小熊英二さんは『基礎からわかる論文の書き方』(二〇二二)の中で端的に論文を書くことについて表現しています。それは、「自分の考えを根拠と論理を持って説明し、人を説得すること、他に他ならない」ということ、つまり「人を説得する技法」そのもののなのです。先に挙げた五つのポイントは、まさに自分ではない他者に対して、自分の主張の独創性や斬新さを妥当性や信頼性を持った論証を示すことで、相手に納得してもらおうということなのです。「自分ではない他者を説得する」というところが、論文のポイントなのです。小熊さんはこうも言います。「人間は不完全だから進歩しようと努力する。でも一人でできることには限界がある。だからこそ書いて人と対話する。論文を書くということは不完全さに気づき完全さを追い求めることである」。論文を書くということは、他者とともにによりよい世界を構築していく最初の一步だと私は思います。

(立命館大学)

編集後記

貝塚事務局長が、国立国会図書館の逐次刊行物のISSN(国際標準逐次刊行物番号)の登録申請をしてくださり、承認されました。本会報第77号から、表紙右上に表示しています。毎回納本し、国立国会図書館の蔵書として広く国民に公開されます。

また、この7月から、会報を学会HPにて公開します。ただし、会員の利点を尊重し、最新号はこれまで通り紙面で提供します。一方、学会HPでは最新号の発行に合わせて4号前を一年遅れで掲載します。左記の2次元コードからご覧いただけますのでお試しください。

(広報委員)

※江島先生による「道德教育を支えてきた名著2」の『德育如何』をデジタルで読める慶應義塾大学の2次元コードです。

